

病害虫発生予報 第3号 (6月予報)

和歌山県農作物病害虫防除所

< 予報の概要 >

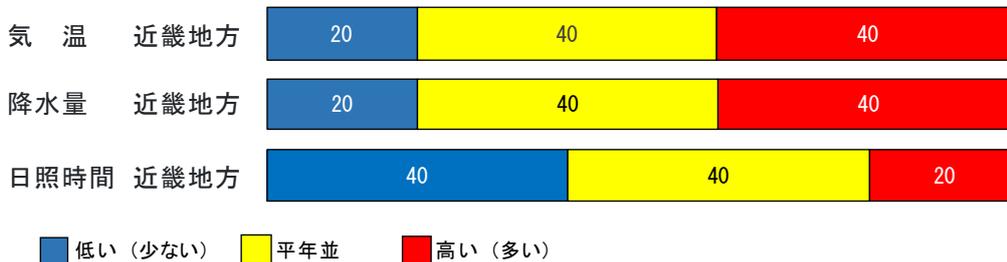
作物名	病害虫名	発生量	作物名	病害虫名	発生量
水稲	いもち病	並	カンキツ	黒点病	やや多
	ヒメトビウンカ	並		かいよう病	並
	縞葉枯病	やや少		ミカンハダニ	やや少
	ツマグロヨコバイ	並		ヤノネカイガラムシ	並
	セジロウンカ	並		チャノキイロアザミウマ	やや少
	トビイロウンカ	並		アブラムシ類	やや少
ウリ科野菜	イネミズゾウムシ	やや少	カキ	うどんこ病	並
	モザイク病	並		円星落葉病	並
	べと病	やや多		角斑落葉病	やや多
	褐斑病	並		カキクダアザミウマ	並
	うどんこ病	やや少	チャノキイロアザミウマ	やや多	
	疫病	並	フジコナカイガラムシ	並	
野菜全般	つる枯病	並	モモ	せん孔細菌病	並
	炭疽病	並	カイガラムシ類	やや多	
	アブラムシ類	やや多	キウイフルーツ	かいよう病	並
	ハダニ類	県北部 やや多 県中部 並 県北部 並 県中部 やや多		果樹全般	カメムシ類
	ミナミキイロアザミウマ	並			
	ミカンキイロアザミウマ	並			
シロイチモジヨトウ	やや多				

気象予報

近畿地方 1か月予報 (05/24~06/23)

2025年05月22日14時30分 大阪管区气象台 発表		
特に注意を要する事項	期間の前半は気温の変動が大きいです。	
向こう1か月 05/24~06/23	天候	期間の前半は、天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。期間の後半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。
	気温	平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。
	降水量	降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。
	日照時間	日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。
1週目 05/24~05/30	気温	1週目は、低い確率60%です。
2週目 05/31~06/06	気温	2週目は、高い確率50%です。
3~4週目 06/07~06/20	気温	3~4週目は、高い確率50%です。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%)



I. 水 稲

1. いもち病（苗いもち、葉いもち）

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 低温、日照不足、長雨が続く条件で発生しやすい。

② 県南部の早植え地域の常発地では気象条件に注意し、発生を認めたら直ちに薬剤防除を行う。

③ 県北部、県中部の普通期栽培地域では、「コシヒカリ」、「キヌヒカリ」などの罹病性品種を作付けする場合には育苗箱施薬剤を施用する。

④ 田植え後の余り苗を水田に放置しない。

2. ヒメトビウンカおよび縞葉枯病

(1) 予報内容 ヒメトビウンカ 発生量 並
縞葉枯病 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 予察灯による5月1～20日の誘殺数は、紀の川市、上富田町および那智勝浦町でいずれも0頭（平年：紀の川市0頭、上富田町0頭、那智勝浦町0.2頭）であった。

② 県北部におけるヒメトビウンカ（越冬世代）のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率は、和歌山市1.6%（平年4.2%）、かつらぎ町1.7%（平年4.3%）であった。

③ 県北部および中部の本田における前年のイネ縞葉枯病の発生面積率は0%（平年3%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① イネ苗へのヒメトビウンカの飛来を防ぐため、雑草地付近での育苗を避ける。

② 田植え時はヒメトビウンカに効果がある育苗箱施薬剤を施用する。

③ 第2世代成虫は6月中旬頃に水田に飛来し、第3世代幼虫の発生最盛期は6月下旬頃と考えられることから、前年に縞葉枯病の発生が認められた地域では、この時期の幼虫を対象に追加防除を行う。

3. ツマグロヨコバイ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 予察灯による5月1～20日の誘殺数は、紀の川市、上富田町および那智勝浦町でいずれも0頭（平年：紀の川市0頭、上富田町0.2頭、那智勝浦町0頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 田植え時にツマグロヨコバイに効果がある育苗箱施薬剤を施用する。

4. セジロウンカ

(1) 予報内容 発生時期 早い 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 予察灯への初飛来は、上富田町5月3日（平年5月25日）であった。5月20日現在、紀の川市（平年6月17日）および那智勝浦町（平年5月28日）では飛来を認めていない。

② 予察灯による5月1～20日の誘殺数は、上富田町で1頭（平年0.3頭）、紀の川市および那智勝浦町でいずれも0頭（平年：紀の川市0.1頭、

那智勝浦町 0.6 頭) であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 田植え時にセジロウンカに効果がある育苗箱施薬剤を施用する。
- ② フィプロニル剤に対する感受性低下が報告されている。

5. トビイロウンカ

(1) 予報内容 発生時期 並 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 5月20日現在、県内の予察灯(紀の川市、上富田町、那智勝浦町)への飛来は認められていない(平年の5月1~20日の誘殺数:紀の川市0頭、上富田町0.1頭、那智勝浦町0頭。平年の初飛来日:6月22日)。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 田植え時にトビイロウンカに効果がある育苗箱施薬剤を施用する。
- ② イミダクロプリド剤、クロチアニジン剤、チアメトキサム剤に対する感受性低下が報告されている。

6. イネミズゾウムシ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 予察灯による5月1~20日の誘殺数は、紀の川市0頭(平年0.1頭)、上富田町4頭(平年26.0頭)、那智勝浦町4頭(平年17.7頭)であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① イネミズゾウムシに効果がある育苗箱施薬剤を施用していないほ場で、田植え3~7日後に成虫による食害株率が30%あるいは成虫が1株あたり0.5頭を超える場合は、直ちに薬剤防除を実施する。

※ 水稻害虫の発生動向については、鳥獣害対策課ウェブページ内農作物病虫害防除所の水稻害虫の予察灯誘殺消長も参考にする。

II. 野 菜

<ウリ科野菜>

1. モザイク病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の施設栽培キュウリおよび露地栽培スイカにおける5月中旬の発生ほ場率はいずれも0%(平年:キュウリ0%、スイカ0%)であった。
- ② 県中部の施設栽培キュウリおよび露地栽培スイカにおける5月下旬の発生ほ場率はいずれも0%(平年:いずれも0%)であった。
- ③ アブラムシ類の発生は平年並と予想される。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① アブラムシ類の防除を行う。

2. ベと病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

- ① 県北部の施設栽培キュウリにおける5月中旬の発生ほ場率は40%(平年48%)、発病葉率は2.2%(平年5.5%)であった。

② 県中部の施設栽培キュウリにおける5月下旬の発生ほ場率は92%（平成62%）、発病葉率は21.1%（平成14.0%）であった。

③ 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 施設栽培では換気を十分に行い、湿度低下を図る。

② 薬剤防除は予防散布を重点に、薬液が葉裏に十分かかるように行う。

3. 褐斑病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部の施設栽培キュウリにおける5月中旬の発生ほ場率は10%（平成9%）、発病葉率0.3%（平成0.3%）であった。

② 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 施設栽培では換気を十分に行い、湿度低下を図る。

② 罹病葉や収穫後の残さは速やかに処分する。

③ 資材に付着した病原菌の胞子が伝染源になるので、支柱等再利用する資材は栽培終了後に消毒する。ネットやマルチ等は更新する。

4. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県北部の施設栽培キュウリにおける5月中旬の発生ほ場率は0%（平成：発生ほ場率19%、発病葉率1.3%）であった。

② 県中部の施設栽培キュウリにおける5月下旬の発生ほ場率は33%（平成79%）、発病葉率は5.2%（平成22.8%）であった。

③ 県北部の露地栽培スイカにおける5月中旬の発生ほ場率は0%（平成0%）であった。

④ 県中部の露地栽培スイカにおける5月下旬の発生ほ場率は0%（平成0%）であった。

⑤ 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 施設栽培やトンネル栽培では風通しを良くし、薬剤防除は薬液が葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。

5. 疫病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部の露地栽培スイカにおける5月中旬の発生ほ場率は0%（平成0%）であった。

② 県中部の露地栽培スイカにおける5月下旬の発生ほ場率は0%（平成0%）であった。

③ 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 薬剤防除は予防散布を重点に、6月上旬頃から定期的に行う。

② ほ場の排水を良くし、マルチ、敷わらを行う。

6. つる枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部の露地栽培スイカにおける5月中旬の発生ほ場率は0%（平成0%）であった。

- ② 県中部の露地栽培スイカにおける 5 月下旬の発生ほ場率は 0%（平成 0%）であった。
- ③ 6 月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 梅雨期の降雨にともない株元から発病するので、薬剤散布にあたっては薬液が株元にも十分かかるように行う。

7. 炭疽病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部の露地栽培スイカにおける 5 月中旬の発生ほ場率は 0%（平成 0%）であった。
 - ② 県中部の露地栽培スイカにおける 5 月下旬の発生ほ場率は 0%（平成：発生ほ場率 7%、発病葉率 0.6%）であった。
 - ③ 6 月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 6 月以降の露地条件で降雨が続くと、病斑上の胞子が雨滴などで飛散するため被害が拡大しやすい。降雨前の予防散布に努める。

<野菜全般>

1. アブラムシ類

- (1) 予報内容 発生量 やや多
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部の施設栽培ナスにおける 5 月下旬のモモアカアブラムシの発生ほ場率は 0%（平成：発生ほ場率 2%、生息葉率 0.1%）、ワタアブラムシの発生ほ場率は 20%（平成 2%）、生息葉率は 0.3%（平成 0.04%）であった。
 - ② 県中部の露地栽培スイカにおける 5 月中旬のワタアブラムシの発生ほ場率は 88%（平成 58%）、生息葉率は 4.9%（平成 2.8%）であった。
 - ③ 黄色水盤（紀の川市）の 5 月 1～20 日の飛来数は 166 頭（平成 163 頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。
 - ② 薬剤散布にあたっては薬液が葉裏に十分かかるように行う。

2. ハダニ類

- (1) 予報内容 発生量 県北部 やや多
県中部 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部の施設栽培ナスにおける 5 月下旬のカンザワハダニの発生ほ場率は 10%（平成 15%）、生息葉率は 0.1%（平成 1.4%）、ナミハダニの発生ほ場率は 20%（平成 2%）、生息葉率は 1.7%（平成 0.1%）であった。
 - ② 県中部の露地栽培スイカにおける 5 月中旬のカンザワハダニの発生ほ場率は 56%（平成 60%）、生息葉率は 7.6%（平成 6.5%）、ナミハダニの発生ほ場率は 19%（平成 6%）、生息葉率は 0.6%（平成 0.9%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。
 - ② 薬剤散布にあたっては薬液が葉裏に十分かかるように行う。

(2) 予報の根拠

① 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 5月下旬までに薬剤散布を実施していないほ場では早急（6月上旬）に防除を行う。

② マンゼブ剤またはマンネブ剤を用いる場合、散布後の累積降水量が200～250mmとなった時点、または1か月を経過した時点のどちらかの早いタイミングで次の散布を行う。

③ 伝染源となる枯枝や剪定枝の処理を徹底する。

2. かいよう病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 予察ほ場（無防除、有田川町奥）における越冬病斑の発生葉率は6.7%（平年9.2%）であった。

② 前年10月中旬の県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における春葉発病の発生ほ場率は25%（平年19%）、発病葉率は1.2%（平年0.5%）であった。

③ 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 薬害対策を講じた上で銅水和剤の予防散布を行う。

② 罹病枝葉の剪除と防風垣や防風ネットの整備に努める。

3. ミカンハダニ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 予察ほ場における5月中旬の100葉あたりの雌成虫数は、無防除区2頭（平年34.5頭、多発年であった令和元年を除いた過去9年の平均12.6頭）、マシン油乳剤を散布している慣行防除区0頭（平年0頭）であった。

② 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 薬剤抵抗性対策としてマシン油乳剤の散布を励行する。マシン油乳剤の散布は発生初期に行うと高い防除効果が得られる。

4. ヤノネカイガラムシ

(1) 予報内容 発生時期 並

第1世代1齢幼虫最盛期 5月26～30日

同 2齢幼虫最盛期 6月17～26日

同 雌成虫初発日 6月20～24日

発生量 並

(2) 予報の根拠

① 予察ほ場（無防除、有田川町奥）における第1世代1齢幼虫の初発は5月13日（平年5月11日）であった。

② 前年10月中旬の発生ほ場率は0%（平年5%）、寄生果率は0%（平年0.3%）であった。

③ 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 防除適期の2齢幼虫最盛期にネオニコチノイド系等の殺虫剤を散布する。

5. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 予察ほ場（無防除）における黄色粘着トラップによる5月1～20日の誘殺数は由良町13頭（平年31.1頭）、有田川町4頭（平年13.7頭）であった。
 - ② 6月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 地域での発消長調査の結果を参考にするとともにほ場内の観察に努め、適期に薬剤散布を行う。
 - ② 防風樹のイヌマキやサンゴジュの近くでは発生が多くなるので、特に丁寧に薬剤防除を行う。

6. アブラムシ類

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
- ① 予察ほ場（無防除、有田川町奥）における5月中旬の発生新梢率は0%（平年1.7%）であった。
 - ② 6月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 各ほ場で発生状況を観察し、適期防除に努める。

<カ キ>

1. うどんこ病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 県北部における5月中旬の「富有」での発生ほ場率は12%（平年20%）、発病葉率は0.3%（平年0.5%）であった。
 - ② 6月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 伝染源となる病斑上の分生子は、6月以降活発に形成され伝染を繰り返す。病原菌は葉裏の気孔から侵入するため、薬剤防除にあたっては葉裏にも丁寧に薬液を散布する。

2. 円星落葉病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 前年10月の「富有」における発生ほ場率は25%（平年41%）、発病葉率は5.9%（平年3.3%）であった。
 - ② 6月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 子のう胞子飛散は、5月上中旬から始まり、5月下旬～7月中旬の降雨後に多い。二次感染はしない。
 - ② 薬剤防除は、5月から8月までマンゼブ水和剤、マンネブ水和剤、有機銅水和剤等を定期的に予防散布する。

3. 角斑落葉病

- (1) 予報内容 発生量 やや多
- (2) 予報の根拠
- ① 前年10月の「富有」における発生ほ場率は94%（平年70%）、発病葉率は15.2%（平年11.8%）であった。
 - ② 6月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 分生子による感染は5月上中旬から始まり、7月中下旬まで続く。二次感

染を繰り返す。

② 薬剤防除は円星落葉病に準ずる。

4. カキクダアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部における5月中旬の発生ほ場率は0%（平成1%）であった。

② 予察ほ場（無防除、紀の川市粉河）における黄色粘着トラップによる4月21日～5月20日の誘殺数は0頭（平成0頭）であった。

③ 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 防除適期は新成虫飛来期の6月上中旬である。

5. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 予察ほ場（無防除、紀の川市粉河）における黄色粘着トラップによる4月21日～5月20日の誘殺数は8頭（平成3.6頭）であった。

② 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 防除適期は新成虫飛来期の6月中下旬である。

6. フジコナカイガラムシ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部における5月中旬の「富有」での発生ほ場率は0%（平成5%）、寄生花蕾率は0%（平成0.2%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 防除適期であるふ化幼虫発生盛期の6月上中旬に薬剤を散布する。多発ほ場では特に丁寧な散布を心がける。

<モ モ>

1. せん孔細菌病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部における5月中旬の葉での発生ほ場率は60%（平成63%）、発病葉率は1.1%（平成2.2%）であった。

② 県北部における5月中旬の果実での発生ほ場率は0%（過去7年の平均14%）、発病果率は0%（同0.5%）であった。

③ 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 防風ネット、防風樹の設置などの防風対策を励行する。

2. カイガラムシ類

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 県北部における5月中旬のカイガラムシ類（ウメシロカイガラムシ・クワシロカイガラムシ・ナシマルカイガラムシ）の寄生枝の発生ほ場率は10%（平成5%）、寄生枝率は0.6%（平成0.2%）であった。

② 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 防除適期であるふ化幼虫発生盛期に薬剤を散布する。多発ほ場では特に丁寧な散布を心がける。
- ② 近年の第2世代ふ化幼虫発生盛期は、ウメシロカイガラムシが7月1～5日頃、クワシロカイガラムシが7月11～15日頃、ナシマルカイガラムシが7月21日～8月5日頃である。ほ場の主な発生種に合わせて薬剤散布を行う。

<キウイフルーツ>

1. かいよう病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部における5月中旬の発病葉の発生ほ場率は0%（過去6年の平均0%）であった。
 - ② 6月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 新梢の萎れ・黒変や樹液の漏出がみられる枝は、前年枝の基部から切除する。
 - ② 作業に使用した器具類（ハサミ、ノコギリ等）は70%エタノールで消毒する。
 - ③ 風当たりの強いほ場では、防風対策を行う。

<果樹全般>

1. カメムシ類

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
 - ① 紀の川市粉河の予察灯における5月1～20日の誘殺数は、チャバネアオカメムシが94頭（前年3,279頭、平年482頭）、ツヤアオカメムシが79頭（前年1,027頭、平年196頭）であった。
 - ② 有田川町奥の予察灯における5月1～20日の誘殺数は、チャバネアオカメムシが38頭（前年479頭、平年131頭）、ツヤアオカメムシが56頭（前年657頭、平年318頭）であった。
 - ③ みなべ町東本庄の予察灯における5月1～20日の誘殺数は、チャバネアオカメムシが58頭（前年1,015頭、平年270頭）、ツヤアオカメムシが336頭（前年3,895頭、平年1,714頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 果樹カメムシ類の飛来量はほ場間差が大きいので、ほ場内での発生および被害状況を観察し、防除は発生に応じて早めに行う。
 - ② 山林に隣接するほ場でカメムシ類の飛来する時期が早いので、このようなほ場では特に注意が必要である。
 - ③ ウメの被害は品種間差が大きい。小梅類等の収穫の早い品種で集中して加害される傾向があるので、これらの品種では特に注意が必要である。
 - ④ カキでは「富有」で被害が大きいため、特に注意が必要である。
 - ⑤ 今後の発生動向については、農林水産部鳥獣害対策課ウェブページ内農作物病害虫防除所の果樹カメムシ情報や各地域の振興局農業水産振興課、JA等の情報を参考にする。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○鳥獣害対策課ウェブページ <農作物病虫害防除所>

<https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/072000/d00216368.html>

○和歌山県ホームページ <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病虫害防除所の各担当までお願いします。

水稲、野菜、花き

本所（紀の川市、農業試験場内）

TEL 0736-64-2300

カンキツ

有田川駐在（有田川町、果樹試験場内）

TEL 0737-52-4320

カキ、モモ

紀の川駐在（紀の川市、果樹試験場かき・もも研究所内）

TEL 0736-73-2274

ウメ

みなべ駐在（みなべ町、果樹試験場うめ研究所内）

TEL 0739-74-3780